

崔 胤 小 傳

横 山 裕 男

序 章

唐・宣宗の大中年間のこと、宰相崔慎由の家に男児が出生した。生れおちたとき腋の下に彫物のごときあざがあるのが目についた。次第に輪郭がはっきりとするにつれて、それがかつて浙西觀察使であったとき慎由が親交をもった瓦官寺の僧の名であることがわかった。この児に幼名として僧にちなんで、「緇郎」の名が与えられた。この子は七歳になっても肉類は一切口にしない。或日、一人の僧侶がやってきて緇郎に会いたいという。会わせると、僧侶は緇郎の頬をなでながらいった。

「これから良い官爵を目ざそうというのに肉を喰わずに何とする。」

それ以来、緇郎は生臭物も口にするようになった。この子は慎由が晩年になってからの子であった。はじめ、人相見に宰相の面態に出世間違いない子にめぐまれる相があるといわれ、夫人やお手附きの侍女たちを見せてどの女性に娠らせたらよいのかと問うたが、どれにもその相はないといわれた。ふと思いついて、かつて夜伽の役をつとめさせた官妓をみせたところ、これこそ件の男子を生む女性だとのこと。その通り懐妊して生れたのが緇郎であった。この緇郎こそ後の宰相崔胤その人である①。

この話は唐語林3 夙慧、に見える崔胤の出生に紐わる因縁話で、どこまで真実であるか保証の限りではないが何となく崔胤の生涯を暗示する点がありそうである。もっともこんな話は崔胤の生涯をみつめた後の人々が、さまざまな噂話などから作り出したものにすぎぬといえばそれまでだが、誰その一生がそうなるには理由があったのだという因縁話は、いつの世にも有名人にはついてまわるもので、まんざら一から十まで荒唐無稽としりぞけるわけには行かないものをもってい

ることも認めてよいのではあるまいか。

第一に唐朝きっての名族と称された崔氏一族の中にあって、出した宰相は崔慎由がはじめての南祖房といわれる系統に属する家に生れた胤が、宰相を続出する家にまで自己の門地を従来の門閥主義者とはちがった仕方でも高めたいと、宰相の地位に執着するであろうこと。それは僧侶にあやかった幼名緇郎にふさわしい潔斎の生活も、立身出世のためとあればあっさり放棄してしまうほどのすさまじさであること。

第二に、官妓の腹からの生まれだということでは誰しも彼が果して崔氏の血筋なのかどうか疑いの目で見るとちがいない。主流派ならざる南祖崔氏は崔氏一門の中では評価をおとしかねない。それを避けるためには他の系統の崔氏出身者を何としてでも政治の表舞台から締め出そうとするであろうこと。事実、崔氏の主流派の一つと見られていた博陵第二房出身の崔遠は昭宗・乾寧3年(896)9月二度目の返咲きを果した崔胤と共に宰相に登用され、光化3年(900)9月罷免されているが、この間の継続在位期間が長いにも拘らず影の薄い存在に終止した。崔遠は胤の協力者たることよりも胤の敵手である徐彦若・王搏の側に立って胤を牽制することを期待されての同時起用であったと思われる。光化3年9月の罷免も崔胤が広州出鎮の途上からの召還と宰相への三度目の返咲きの後の徐彦若・王搏への報復の措置と連還するものであろうことを推測するに充分な裏付けをもつ②。以来、崔胤の死後、崔遠が再登用されるまで南祖房以外の崔氏出身の宰相は出ていない。

唐語林の崔胤の出生に紐わる因縁話をきっかけにして、崔胤の生涯のごく一端にふれるのが、この一篇の目的である。紙数に限りがあるので、崔氏の家系、ことに清河崔氏についての若干の問題と、崔胤と朱全忠との連携による宦官誅滅とその

後についてにしばって考えたいと思う。

一

旧唐書 177 崔慎由伝は、父・從・伯父能・慎由本人・弟安潜そして胤の伝を一括して収載する。それによると、この崔氏の一系統の本貫は清河（貝州）武城県で唐に入って最も早い世代には崔融が居るが、別に伝が立てられている。ところがその伝（旧唐書94）には、「齊州全節の人」と記されて慎由の伝とは合致しない。そこで同系統の人といわれながら別伝を立てられている崔昭緯伝（旧唐書 179）を見ると「清河の人」と記すのみであり、崔神基伝（旧唐書77）には「貝州武城人」と記していても郡又は州名においては合致する。ところが、新唐書 114 には崔融・從・能・慎由・安潜・彦曾の伝を併記するが、その本貫は「齊州全節」とされ、旧唐書の融伝と合致する。また崔昭緯は崔胤と同じ新唐書 223_下、姦臣_下に収載されるが、そこには「其先清河人」とあるのみで父祖への言及はなく旧唐書とは異った記載をしている。次に新唐書 109 崔神基伝には「貝州武城人」とあり、旧唐書本伝及び崔慎由伝と合致する。

さて、錢大昕 二十二史考異60 旧唐書 4 崔慎由伝の項には、崔融伝との記載のちがいを指摘して、崔慎由伝はその姓望つまり祖先発籍の地をあげたのであろうといっている。とすれば、崔慎由が宣宗朝に宰相となってから、改めて自己の系図をたどってみると父・從以後と以前とのつながりがなくなっていた。そして崔融はすでに姓望の地とはちがった、祖先の或る人物（後述）が本拠を移した齊州全節の人を名告っていた。しかし、門地に関してはなかなか喧しかった慎由は姓望の地清河武城を名告りつづけたというところであろう。そして旧唐書列伝の執筆者は崔融については別に伝ありと切離してその場を逃れたのであるらしい。また錢氏は慎由の曾祖父翹についても両伝間に記載のちがいがあることを指摘している。すなわち慎由伝に「曾祖翹の官職は礼部尚書・東都留守に終わった。」と記すのに、融伝には「開元中に中書舍人をつとめた」と記している。このことは、旧唐書の同じ一系統の家系に属する人々の伝が二つの異った時期に作られた材料によって書かれたことを物語る。そして慎由伝に「高祖融の官職は国子

司業に終わった。諡を文公と云う。本人について伝が立てられている。」と記すのと照合すると、清河武城出の南祖崔氏は融のときには本拠は齊州全節にかたまっていたことを白状した形になっている。世系表によると南朝宋の庫部郎中崔靈茂のときに南祖を称する崔氏は全節に居住するようになったのだという。これは、唐も末期になっても門閥意識は衰えておらず、とりわけ自己の家系にはたえて出なかった宰相でも出すとどんな無理をしてでも由緒ある門閥に結びつける工夫がされたことを露呈しているのではなからうか。新唐書 姦臣伝の崔昭緯についての記述などはもっと露骨に、

「其の祖先は清河の人ということだがそれ以上のことはわからぬ。」

と記し、世間では崔昭緯が宰相になってから清河崔氏の一族などともちあげるが、本当のところはわからぬといたげである。しかも同じく新唐書 72_下表12_下宰相世系_下（以下「世系」と略称）には、南祖崔氏の本流翹の玄孫に位置づけているのはどういうことなのであろうか。後にもう少し考えてみたい。旧唐書本伝にしても「清河の人」と記した後、祖父と父の名と最終位を記すのみでそれ以前には言及しないのは、宰相になってあくどい働きをしたので浮び出たが、そうでなければどこの馬の骨の崔氏かわからぬといたげである。

唐朝きっての名族崔氏で宰相を最低一人を出した系統は十房に分かたれるということが新唐書「世系」崔氏の部に記されている。それによると、崔氏の祖先は齊の丁公伋の嫡子季子に遡り、季子が公位継承権を叔乙に譲って、采邑を崔に与えられたことに発源するが、それから30世の孫に意如があり、彼は秦に仕え東萊公に封ぜられ二人の子があった。長子業と少子仲牟である。業字伯基は漢の東萊侯に封ぜられ清河郡東武城に居を構えた。これが所謂清河崔氏の源流である③。仲牟は所謂博陵崔氏の源流である。二つの流れは長い時間の推移の間に多くの核拡散を繰返したことはいうまでもない。「世系」が記すのは文字どおり、その家系の中で一人でも宰相を出したものについて可能な限りの材料蒐集によって採りあてたことがらである。しかし、その記載は必ずしも列伝、宰相年表と合致するものではない。そこに多くの疑問や混乱が生ずるのはやむを得ない。そこに欧

陽脩らの「世系」編著の目的があったのではなかったろうか。唐代まで喧しかった世系などというものも科挙出身者によってしか高級官僚特に宰相になることが期待できぬとすれば価値のないものになってしまうはずであるが、唐末の門閥出身者は科挙出身者ともなつて宰相を独占しようとした。そこに自分の門閥にこれだけの宰相があるという数字による宣伝が行なわれる余地を生じ、非門閥出身と思われる者も同姓であれば互に有無を通じあおうとしたのではなからうか。しかし、それも所詮つまらぬことだったのだ。現にたった一人の宰相を出しただけで消えてしまった家のために世系をつくればこうなり、崔昭緯などはこのような作意④がありありと見えるではないかと語りかけているのではないかと思う。

二

清河崔氏の系統は、(一)鄭州房 (二)許州陽陵房 (三)南祖房 (四)清河大房 (五)清河小房 (六)清河青州房を数える。「世系」によってみると、六系統のそれぞれが出した宰相の数は、(一)鄭州房一人、(二)許州陽陵房一人、(三)南祖房五人、(四)清河大房一人、(五)清河小房三人、(六)清河青州房一人であり、その多くは武后中宗期か宣宗以後の時期に属する。

ここで簡単に、宰相となった人々が「世系」の中にどのように位置づけをされているかをみることにしよう。

(一)鄭州房 「世系」には蔚から表示される系統。宋から北魏に逃れた蔚が滎陽郡に居を構えたので鄭州房と称する。

崔元儆。武后朝。旧唐書 90・新唐書 106。いずれも祖・君肅について武徳中の黄門侍郎・鴻臚卿と記す。父についてはふれない。また子孫についての記述もない。「世系」による略系図は別表(2)のようになる。どうやら、元儆が宰相になって後に北史にその存在がたしかな崔彦穆の後につけさせて貰ったのではないかと疑われる。列伝の資料と「世系」の資料とに合致しない点があったらしいことも指摘できよう。

(二)許州陽陵房。鄭州房の蔚の子或が許州陽陵に居を構えたので許州陽陵房と称する。

崔知温。高宗朝。旧唐書 185上・新唐書 106。新唐書本伝には

「転黄門侍郎脩国史、永隆初、以秩卑、特詔同門下三品兼脩国史」

とあり、宰相待遇の国史編纂官ということであつて、宰相の実務にたずさわつたとは思えない。「世系」には子の名を欠いている。

(三)南祖房。三つの系統がある(別表(1)参照)。

(a)「世系」には君実から表示される系統。

(i) 崔昭緯。昭宗朝。旧唐書 179・新唐書 223下。旧唐書本伝には祖庇・父瑋については記すがそれ以前には遡及しない。新唐書本伝には世系については全くふれない。一方「世系」は融の子翹から出る系統につなげている。

(ii) 慎由・胤については前述した。

(b)(c)とともに何故に南祖房に並べるのかわからない点がある。「世系」には遡から表示する系統。

崔翥。武后朝。両唐書とも伝が見当らない。新唐書 63表 3 宰相下(以下「年表下」と略記)には光宅元年(684)10月丁酉から垂拱元年(685)3月までその地位にあったことを記す。

(c)「世系」には概から表示する系統。

崔神基。武后朝。旧唐書 77・新唐書 109。いずれも父義玄伝に附伝されている。父義玄は隋末大業の乱の際、李密に投じたが用いられず、唐に帰順したとあるが、それ以前については何も記さない。清河大房・小房・青州房と遠祖を同じくする。清河大房・小房・青州房の表に示される北魏・北齊時代の著名人については北史列伝によつていずれも瑛にたどりつくことをたしかめることができるが、この系統の遡及び禕については魏書 32 崔暹伝によつて知り得る。しかしその後についてさだかにしがたい。これらを考えあわせると、これも唐になってからの合譜の所産というべきか。

(四)清河大房。「世系」には休から表示する系統。

崔龜從。宣宗朝。旧唐書 176・新唐書 160。旧唐書本伝には「清河人、祖鑽・父誠官徵。」とあり、新唐書本伝には「大中時、又有宰相崔龜從、字玄告」とあるのみで本貫、父祖にはふれ

ない。多分に素姓に疑を存した書きぶりである。「世系」には祖・父の名が旧唐書本伝とは顛倒してのせられ、曾祖父とされる暉は、旧唐書186良吏伝に記載される崔隱甫の従兄弟の位置におかれている。隱甫の祖先は北魏殿中尚書休にまで遡りうることは、魏書、北史によってたしかめうるが、龜從の曾祖父とされる暉と祖父鑽（又は誠）の間に直接つながりがあるのかどうかええたしかめる手だてがない。これらの混乱は、崔龜從の清河崔氏の中における位置についても疑をのこすものに他ならない。

(4)清河小房。「世系」には子令・公華兄弟から表示する系統。

(a)崔羣。憲宗朝。旧唐書159・新唐書165。

(b)崔羣。文宗朝。旧唐書155・新唐書163
⑤。「世系」には宣宗朝に宰相となったとあるが、両唐書本伝、新唐書「年表」及び資治通鑑246 唐紀文宗開成4年秋7月甲辰の条以下によると、崔羣は、文宗開成4年(839)7月に登用され、武宗会昌元年(841)11月検校吏部尚書同平章事として劍南西川節度使に出鎮しているので改めた。会昌以後はいわゆる使相として出鎮することに終始したらしいことが両唐書本伝にうかがえる。

(c)崔彦昭。僖宗朝。旧唐書178・新唐書183。旧唐書本伝には「清河の人、父豈」とあり、新唐書本伝には「其先清河の人」とある。「世系」には、「父玘」とあり高祖湛以前二代が空欄となって上につづき公華に遡るが、この空欄の存在が合譜を疑わせる。このことはまた崔羣の曾祖も湛になるので同じことが云えると思われる。小房の正統は世評どおり崔羣兄弟につづくというべきか⑥。

(4)清河青州房。「世系」には脩之から表示する。

崔_門。肅宗朝。旧唐書108・新唐書140。旧唐書本伝には、「清河東武城人。後魏左僕射〔崔〕亮之後、父景暉官至大理評事。」とあり、新唐書本伝にも「貝州武城人。後魏尚書左僕射〔崔〕亮八世孫。」とあって、いずれも、圓の出身が北魏の大官崔亮の血をひく歴としたものであることは認めている。しかし、圓が生れたころには、すっかり没落していて、圓は幼い頃から身寄りのない貧しい暮らしを余儀なくされた。開元中、

遺逸の詔挙に応じて合格し、執戟に任ぜられたが、圓は大いに不満であったとも記されている。圓を除いてこの家系には「世系」にあらわれる限りで唐一代さしたる人物を見出せない。また別表に見られるとおりの圓にとって高祖にあたる人の名が欠落しているのが気になる。遺逸の挙に応ずるに当って崔氏の姓を利用した何らかの工作があったのではなからうか。

以上、清河崔氏出身の宰相たちの系図しらべをしたのだが、同じ様なことがらは博陵崔氏はいうに及ばず、他の氏族についても引出せるのではないかと思う⑦。

新唐書の宰相世系表はなかなか辛辣な皮肉をこめた作品ではないかと思う。列伝などひきくらべてよく眺め怪し気なことがらを引出せと読者に要求しているように思える。南北朝時代や唐代にこのようなものが作られたら囂囂たる杜撰のそしりを免れなかったにちがいない。その非難は北魏書の列伝における本貫の記述をめぐって魏収に及びせられたところのものではなかったのではあるまいか。唐末から五代の混乱を経て、所謂名望家も四方八方に拡散し、遠い祖先について意識することもなくなって、ごく少数の好事家を除いてあまり系図を語るなどということをしなくなった宋代においては、この表のような表現では、自分の祖先や家の継承に不審の眼差しが向けられた、侮蔑視されたなどと即座に頭に血をのぼせるものもなくなっていた。そこでこのような皮肉な作品の発表も可能であったのであろう。

自己の家格の高さを誇ろうとすればどうしてもなるべく古くまで遡って起源を求めることになる。そこに矛盾が生ずる。系図作りの競争の結果、同一の氏のみならず多くの氏が知らず知らずに同一祖先に集中されて行くが、その祖先の系統から独立した時期の古いものが良いというような考え方も生ずる。例えば、「世系」五_下に見える元氏のように、拓拔氏の出自であることは否定しないが、拓拔氏は黃帝の孫偁が北方に本拠をおいたところに生ずるというようなことで元氏は他の黃帝を最終の祖とする氏よりも高い格にあるといったげである。これほど極端なことは流石に世間には受入れられなかったが、恰も日本に於いて長く古く家系を語ると源氏・平氏・橘氏の出身を称

する者がすべて自己の家系の皇室との分岐点となる天皇をとおして邇邇芸命、さらには天照大神・伊弉諾尊にまで行きつくと同じように、崔氏は清河も博陵も古く遡れば斉の丁公伋に行きつき、更に遡ると太公望呂尚を経て、姜姓出自を称する他の氏とともに、炎帝に行きつくことになる。そのようなことの無意味なことは、政治家としての評価はその属する家柄によるのではなくて、あくまでも個人的な才腕によることがはっきりすることで確実なものとなった。祖先のことは直系の五代前までつかんでいれば充分とされた周・漢の考え方にもどった宋代の文化遺産の一つにこのような作品があることの意味を感じる。

三

清河崔氏の中に於ける南祖房崔氏についてもう少し考えてみよう。旧唐書177の史臣曰の文には、

「近代の士族は人物に恵まれ、家門を大いに繁榮させた。とりわけ崔氏は清河は崔從、博陵は崔暹以来、まことに名流人士に恵まれた。しかしながら、崔彦曾が徐州の兵乱にめぐりあわされ、崔胤が唐朝滅亡の運命に行きあたり、いずれもやり方を間違えてしまった。好事魔多しとはこのことではないか。」⑧

と述べて清河南祖房は崔慎由の父從の後に人物を輩出したことを指摘している。「世系」によって見るだけでも從は淮南節度使、從の孫胤は宰相、慎由の弟安潜は太子太傅、從の兄能は嶺南節度使、能の子彦曾は徐州觀察使となっている。彦曾は徐州に発生した龐勛の乱の鎮圧に失敗して賊の手にかかって殺された。清河南祖房崔氏が今日もその存在を知られているのは、從・能・慎由・安潜、就中、從と慎由によるところが大きかった。特に慎由が宰相になったことは意味があった。南祖房は唐末になってその存在をはじめて承認されたかのようである。そこまで達するには苦しい日々もあったであろう。これから何としてでも存在を主張しつづける、つまり守成にこころがけねばならぬと感ずるのは当時であって当然のことであった。ここに、唐代きっての名望のほまれ高い崔氏の名を利用して、これと互角のものとそうでないものを厳格に区別することつまり官僚社会における流品の峻別の主張が執拗になされることになった。新唐書182 劉瑒伝に

かつて、崔慎由と宣宗の前で議論したことがあった。慎由が流品をよく調べて区別してかからねばならぬと主張したのに対して瑒がたずねた。「王衍は晋の宰相としてとりとめもない虚名を尊重するあまり流品にばかり気をとられ政治を混乱させたあげく晋を永嘉の乱の苦難に追いこんでしまった。今日とて流品のことなど先にして、名実ともなうよう百官を職にはげますことをしないとすれば、致治の道理をわきまえぬということになるのではないか。」と。これには慎由もやり返ししようもなかった。これが原因となって慎由は罷免された⑨。

とある。劉瑒は慎由の主張を貴族主義にとりつかれて晋室の南渡の原因を創出した晋の貴族宰相王衍になぞらえて政治をあやまつものと批判したのであった。一方そうした批判があるとしても、崔慎由らの主張も抜きがたい強固さをもっていた。一人でも正規の道を歩んだ高級官僚—唐末ともなれば宰相ぐらいしか高級官僚の実質をそなえた者はなかったが—を一門中に多く出すのでなければ名族の意味はなくなる⑩。そうなれば同じ姓の者で見込みのありそうなのは同族として扱ってやることも一人でも高級官僚を確保して自己の家系の重みを増す道と考えられた。崔昭緯を南祖房崔氏の一族として遇したのもそうした考えに立ったものであったのであろう。そして、そうした措置への返礼の意味もあって崔昭緯は崔胤の推薦を強く行なった。その推薦によって崔胤は宰相たり得た。

しかし、崔慎由の主張する流品の峻別は、かつての崔・盧・李・鄭・王以外に大姓なしとするようなものとはちがっていた。慎由自身の家がそうであったように急激に門地を上昇させる家もあり得ることを否定するものではなかった。そうした風潮はとおらなくなっていた。女を嫁に出すにしても相手の現在の門地よりもむしろその将来性を見ぬく眼力が必要とされた。唐語林4 企羨に

清河の崔氏では小房が最も著名であった。崔程は清河小房の出身であったが、彼の直系家族は代々楚州宝应県に根拠を構え八宝崔氏と号していた。(中略)程はいくつかの州刺史をつとめたがこれといった業績もなかった。ところが小杜宰相(審権)が程の女たちはみめ麗しく情ある者たちと聞いて息子讓能のもとにもらいう

けたいと書面で申入れた。程は頭からはねつけた。そのわけを人に語り聞かせていうには、

「わが崔氏の一族の中に杜氏の息子が入込むなんてとても我慢できぬ」

ということであった。しかし杜宰相も強い申入れをつづけて已まぬので、程も観念して八宝崔氏の家々をあたって一人の姪をさがしだして嫁がせた。その後、杜讓能はすばらしい出世で、その娘も国夫人に封ぜられた。それなのに程の実の女たちは鳴かず飛ばずであった⑩。

という説話を収録する。現在の著名度にばかりたよってはいやがて一族の中でもとり残されるであろうことを語りかけている。もっとも、この話がすべて史実だとすると、程は先見の明があってそうしたということになる。何となれば杜讓能は李茂貞憎しと興奮した昭宗の命で勝目のないことを承知の戦をいどみ、茂貞に内通した崔昭緯においつめられて自尽して果てることになったのだから。

このような南祖房崔氏の守成への途上に期待されたのは良き後継者の獲得であった。ところが慎由にはなかなか子が恵まれなかった。この篇の冒頭にひいた説話は何としても子がほしいと願う男の執念をも伝えるのではなからうか。

新唐書114 崔慎由伝、旧唐書177 崔慎由伝ともに慎由の子には胤の名を記すのみであるが、「世系」には慎由の子に二人を記す。長子に昌遐字貽休、太子賓客。少子に胤字垂休、相昭宗と見える。ところが、新唐書223f 姦臣伝に収載する崔胤の伝には、「崔胤字垂休、宰相慎由子也」とあって「世系」と合致するのだが、伝末に世間では崔慎由には晩年になっても子がなかったが、奇怪な僧侶に出会ってその術によって授かったのが胤だったといっていると記していることと「世系」に二人の子を記載するのは相矛盾する。旧唐書177本伝には「胤字昌遐」とある。「世系」の二人分の諱を一人に合併して諱と字にしたわけである。また唐語林などに見える崔胤に絶る説話では字垂休を用いるが、通鑑263 昭宗天復3年春正月庚午の宦官誅殺の次第の後に附された司馬光の宦官論に於いては、崔胤にふれる場合には宋の太祖趙匡胤の諱をさけ字を用いているがそれは昌遐である。崔胤の字に昌遐を用いた司馬光の判

断がいくこにあったのかわかりかねるが、司馬光は胤に垂休の字があることを承知していた筈である。とすれば垂休は胤の若いころの、昌遐=遠きに光を及ぼすの意を寓するか=の字は宰相となつてから使用したものとして採用したのであろうか。となれば「世系」に記された慎由の子の一人は消えることになる。

いずれにせよ崔胤は南祖房崔氏の期待の星として生れてきたことはたしかである。そして高級官僚への道を歩み出した。僖宗の乾符2年(875)進士試験に及第したのをふり出しに、しばらく河中節度使王重榮に招かれて幕僚としてつとめた後、中央政府にもどって考功員外郎、吏部員外郎・吏部郎中・中書舍人・御史中丞などを歴任した。この頃、唐王朝は滅亡への道を着実に歩んでいた。乾符2年、前年蜂起にふみきった王仙芝に呼応して黄巢が兵をあげ、広明元年(880)長安を陥れ齊帝国の成立を宣した。僖宗ははるばる成都に都落した。しかし、中和3年(883)李克用の沙陀軍の手で長安は回復され、翌年、黄巢が朱温の手にかかって黄巢の乱は平定された。黄巢の乱を鎮圧する戦を展開している間に頭角をあらわした者たちが有力藩鎮の主帥となり、名目的に唐の正朔を奉じているというにすぎず、そのような藩鎮の均衡の上によって唐王朝は存在意義を認められていた。その唐王朝の中核は、軍隊をにぎり、次の天子には自分の眼鏡にかなった者を擁立するなど勝手放題を行なった宦官の府(北司)ににぎられ、行政の府である宰相の府(南司)は、伝達される天子の意向と称する物を実施にうつすだけの存在にすぎなかった⑪。けれども、北司にも南司にもそれぞれの内部に主導権をめぐる争がたえず、それぞれの領袖たちは、自己の主導権を有力な藩鎮と結ぶことで確立しようとした⑫。

そのような空気の中に生きるのに、崔胤はなかなか適した気質の持主であったようだ。旧唐書177本伝には、それを説明して、

胤はひそかなたくらみごとに長じたが、それを表だたさぬよう権力者の誰とでもそつなくつき合いが持てた。心の中落ちつかないいらだたしさも見かけの慎重さがおおいしくした。

といっている⑬。慎重な歩みをつづけてきたであろう崔胤は、昭宗の景福2年(893)9月、戸

部侍郎に任じられ同平章事となった。宰相として唐末の政局に参画する第一歩であった。翌々年宰相を罷免されることになる同門の崔昭緯が強く推薦した賜物だということであった。

四

崔胤が宰相になってから死に至るまでの推移を年譜風に表示すると次のようになる。

景福2年(893)9月壬辰、戸部侍郎同平章事。
乾寧元年(894)6月、中書侍郎同平章事。

〃 2年(895)3月、護国軍節度使として河中出鎮を命じられたが果さず。この年正月同節度使王重盈の死後の跡目争いにまきこまれた結果であった。

7月、昭宗混乱を石門鎮にさける。

8月、中書侍郎同平章事。

この月、崔昭緯宰相を罷免される。

乾寧3年(896)7月乙巳、武安節度使として出鎮を命じられる。この月、丙申、昭宗、華州の韓建のもとに「行幸」。

9月乙未、中書侍郎兼戸部尚書同平章事。(朱全忠の後押しによる。)

光化2年(899)正月丁未、同平章事を罷免され、守吏部尚書。

光化3年(900)2月、同平章事を帶し清海節度使として広州出鎮を命じられる。

6月丁卯、司空門下侍郎同平章事諸道塩鉄轉運等使。(朱全忠の後押しによる)

11月己丑、劉季述らのクーデターおこり、昭宗、少陽院に幽閉。

天復元年(901)正月乙酉朔、昭宗反正。宦官の手中から左右中尉を奪おうとしたが果せなかった。

閏11月 塩鉄使を解任される。

11月壬子、左護軍中尉韓全誨ら昭宗を擁して鳳翔へ。

全月、工部尚書を責授される。

12月、在京百官及び士民を帥いて華州に遷る。

天復2年(902)4月、河中に朱全忠を訪れ、昭宗の長安への奉迎を催促。

天復3年(903)正月、李茂貞韓全誨を斬り朱全忠に和を乞う。

・百官を帥いて行在に赴くことを命じられ

ること再三であったが疾と称してたたず。

・丁卯、昭宗を興平に迎え、司空門下侍郎同平章事となり三司をも領した。

・兼判六軍十二衛事

4月、朱全忠判元帥府事。

5月、六軍兵士の増員奏請、裁可される。

天祐元年(904)正月 朱全忠に弾劾され、太子少傅分司を責授。

・戊申、朱全忠の手兵に囲まれ、開化坊の私第に於いて暗殺された。

この中で、宦官対策に於いて崔胤と朱全忠とがほとんど同歩調をとるきっかけになったと思われる光化3年11月の劉季述のクーデター事件をとりあげて、この事件の何がきっかけを与えたのかを探ってみよう。

五

光化3年11月庚寅、明け方の開門時間をすぎても宮門の開く気配がない^⑬。何か異変があったにちがいないと感じた左護軍中尉劉季述が中書政事堂に赴いて崔胤に、自分が内臣の特権を行使して様子を調べるからと了解を求め、禁軍兵士を率いて門を破って宮中に入り一件の次第を調査した。劉季述の説明では、前夜、苑内での狩猟のあとの酒宴でしたたかに酔った昭宗が宮門管理にあたる小黃門宮女数人を手打にしたのだという。このところ過多の飲酒で酒乱気味の昭宗は喜怒哀楽の変化が激しく宦官や宮女たちもびくびくのしどおしだったのが現実になったのだ。このままではとてもまともな皇帝の役は果せそうもないから太子を冊立して昭宗には引退してもらうことにするという決意を劉季述が語った。崔胤は敢えて反対はしなかった。劉季述は百官を召集し禁軍兵士の監視のもとで崔胤らが連名で太子の監国を請う奏文を作成し署名するよう求めた。皆の署名が終ると劉季述・右軍中尉王仲先・樞密使王彦範・薛斉偃ら宦官の主だったところが甲士千人を思政殿に通ずる宣化門外に待機させ、劉・王両名は宣化門を開かせるために朱全忠の宣武軍からの進奏官程巖ら十余人を伴って接見されるよう請うた。門がひらかれ劉・王両名が登殿したのをきっかけに兵士が門内に雪崩こんだ。仰天して逃げようとす

る昭宗を劉・王兩名が兩腋を支えて坐につかせたところへ、事変を聞きつけ皇后がころばむようにしてやってきて、何事かあったのなら劉・王兩名の指図に従うからおだやかに説明してほしい、と云った。これにこたえて兩名は百官の奏文を示して昭宗に引退をせまった。昨夜の出来事はお前たちとしたか飲んだ後のことで覚えがないなどとぐちをこぼす昭宗に皇后はさっさと劉季述らの言い分をみとめるよう説得し、伝国の璽を劉季述にわたした。皇后と同じ輦輿にのせられた昭宗は僅か十余人の侍従をつけられ少陽院に送られ幽閉された。門は厳重に閉された上にとかした鉄で固められる念の入りようであった⑯。

劉季述は皇帝の詔書が下されたといいたてて太子裕を迎え、翌日には太子が即位し名を緡と改め、昭宗は太上皇・皇后は太上皇后と称されることになった。崔胤を殺してしまいたい気持はあったが朱全忠を憚って宰相の地位にとどめたままにした。このことが劉季述一派の没落を招き、昭宗、崔胤の宦官抑圧策を強化させ、韓全誨一派の最期の抵抗行動としての鳳翔行幸の強制に走らせることになったが、結果としては宦官誅滅を一気に実現させることになってしまった。

右軍中尉王仲先はなかなかこまかい人物で、中尉就任以来財政帳簿は徹底的に監査し、少しでも横領・横流しの事実を発見するときびしく糾弾し、横領着服分、横流しで得た利益をも加えた負債の取立ても有無をいわず行なった。禁軍將士はほとんどが脛に傷を持つ身なので動揺と反感があるようであった。この気配を察した崔胤は禁軍の主だった指揮官の中からクーデターに不満をもつ者を探り出し左神策指揮使孫德昭を味方につけ反劉季述行動に協力する仲間神策都將董彦弼・周承誨をかたまって除夜の夜、安福門外に伏兵を置いて入朝する劉季述らを逮捕する手筈をととのえた。計画は実行され成功し、天復元年正月乙酉朔、昭宗は無事救出された。これを天復反正という。短時日の間の皇帝であった太子は元の徳王裕にもどされ生命は保証された。

4月丁丑、天下に大赦令が布告され元号を天復と改め、文宗の大和9年(835)甘露の変の犠牲になって賊臣扱いをされてきた王涯ら十七家の名誉が回復された⑰。これから崔胤がとるであろ

う強硬路線への決意のほどが示されたものといえよう。

ところで、朱全忠が崔胤と結んで宦官誅滅に積極的になったのは、この劉季述のクーデター以後のことであった。朱全忠がクーデターの知らせを聞いたのは對抗馬李克用の定州留後王処直攻撃のための定州行營においてであった。すぐさまとって返して大梁に到着した12月戊辰、劉季述がさしむけた養子劉希度が唐の天下を朱全忠にわたしてもよいからと協力を求めて来た。ついで供奉官李奉本が太上皇の語と称するものを持参して朱全忠に示した。これらの扱いを幕僚たちを集めて協議した。朝廷のことなどに干与するなという大勢の中でただ一人天平節度副使李振⑱が反対した。

「王室の難儀は覇者たらんとする者にとってもってこいの好条件である。今、貴方が置かれているのは唐に於ける斉の桓公・晋の文公の立場であって、今が勝敗の分れ目といえよう。劉季述などはたかの知れた宦官にすぎない。それが天子の幽閉・廃立を行なったというのに、貴方がこれを討つこともできぬというのでは諸侯に号令するなどとてもかなわぬ夢になってしまう。それに幼主が天子の地位に落ついてしまえばそれこそ天下の大権は宦官の手に帰してしまう。それでは、天子の後見役の地位を他人に渡すことになってしまうではないか。」

これを聞いて飄然と悟るところがあった朱全忠は、ただちに劉希度・李奉本を監禁し、李振を京師に派遣して事態をこまかに調査させ、李振の帰還後は信頼する部將蔣玄暉を派遣して崔胤と連絡させた。また、劉季述らの思政殿乱入の手引役を果たした進奏官程巖を大梁に召還した。昭宗反正の知らせを受けると程巖は兩脚を折った上で京師に械送し、劉希度・李奉本らは大梁の広場で斬刑に処した。

こうして、劉季述事件に対する朱全忠の態度を見てみると、朱全忠と劉季述との間にはかねてから何らかのつながりがあったのではないかとの疑いを持たざるを得ない⑲。

劉季述は、昭宗即位に一役買った人物であり以来宦官の首領株が何人か姿を消していった中であって枢密使・左軍中尉の地位を堅持してきた人である。そのような宦官の指導的地位にある人物と

結ぶことは朱全忠にとっても無意味なことではない。また、いつ何時、他人にとってかわられるかわからぬ不安定感に悩まされる劉季述には着実に力を蓄えた藩鎮主帥としての朱全忠と結ぶことが必要であった。両者の関係はもちつまたれつになっていた。そうでなければ劉季述が唐の社稷を朱全忠に渡してもよいなどと協力を申入れるなどというのは不自然なことである。思政殿乱入の兵士の引入役を果たした者の中に朱全忠の進奏官程巖があったが反正の際京師に械送されたのはこの男だけで、劉希度・李奉本は大梁で殺してしまっているが、これは密使をうけていた事実を抹消しようとする意図からであったにちがいない。

一方、崔胤は朱全忠と劉季述との間がどの程度のものであるか承知の上で朱全忠と結び、両者を利用することで朝廷内に於ける自己の地位の安定をはかったのであろう。宦官にはきらわれた彼がクーデター騒ぎの際、殺されずにすんだのは、朱全忠の協力をとりつけるまでは崔胤には手をつけられぬという劉季述のためらいがあったこともあるのではないだろうか。以後、朱全忠は、篡奪の見透しがたつまで崔胤の宦官抑圧に協力し、崔胤のすすめもあって洛陽に一時昭宗を遷そうとして、鳳翔への一時遷居を求める李茂貞に保護を要めた韓全誨らの宦官と対立し、一時、鳳翔へ昭宗の「行幸」をゆるしたが、持久戦によって李茂貞を屈服させ、韓全誨らを斬らせて昭宗を長安に迎えて功績第一とされ、諸道兵馬副元帥からやがて判兵馬元帥事となり篡奪の下準備を着々整えることになるという明るい将来への踏切台に、この事件はなった。

終章

天祐元年(904)正月乙巳、かねて朱全忠から提出されていた崔胤の専権を弾劾し誅殺を要請する申入れに対して、朝廷の決定が発表された。崔胤はすべての官爵を剥奪されて太子少傅を責授され、崔胤の片腕役であった京兆尹鄭元規は循州司戸に貶された他それぞれの処分が行なわれたが、誅殺についてはとりあげられなかった。三日後の戊申の日、崔胤は居合わせた鄭元規ら親しい者た数名とともに朱全忠のさしむけた宿衛の兵士の手にかかって長安開化坊の私第に果てた。

前年正月、鳳翔から昭宗を迎え、宰相に返咲い

た崔胤は徹底的な宦官排除策をおしすすめ、宦官の手ににぎられていた諸司使はすべて廃止して権限を三省九寺の管轄に戻し、各藩鎮への監軍派遣もとり止めとした。その上宦官の中で位階低く幼弱な者三十人を残して数百人に及ぶ在京の宦官を内侍省に駆りたててきて殺害し、当日京師以外の地にある者は各地に伝達して見かけ次第殺させることにするという徹底ぶりであった。詔命の伝達などには女官があてられることになった。禁軍に対する指揮監督権は崔胤自身が総括することにし判六軍十二衛を領した。すべて朱全忠の後盾があったことは云うまでもない。宦官を撲滅したあと、全く宦官がなくてすまずわけにも行かぬので少数を新しく召募したが、それは朱全忠の女婿王鎔が統轄する成徳藩鎮管下の出身者に限られた。成徳は風俗に輕薄さがなく住民の性質が謹直純朴だからというわけであったがそれは表向きで宦官も朱全忠・崔胤派で固めようとの意図からであることはいうまでもなからう。その朱全忠・崔胤路線が何故にかくも簡単に崩壊したのであろうか。

政治の大権を自己の手中に収めた崔胤は何よりも軍備をゆるぎないものにしたいと考えた。今まで連携してきた朱全忠にも関中にまで勢力範囲を拡大して以来天下篡奪の志が生まれたようである。それをおさえるためにも六軍の拡充は焦眉の急務と感じられた。

崔胤が朱全忠に篡奪の志を見てとったのは、昭宗が朱全忠の功に酬いるために皇子を天下諸道兵馬元帥に任命し、朱全忠を副元帥にあてる際の元帥たるべき皇子として朱全忠が輝王祚(後の昭宣哀帝祝)の推薦方を強く求めた時であった。崔胤の推薦に対して昭宗はもっと年長者として濮王があるではないかとこだわったが崔胤は輝王を推しつづけた②。崔胤にはかつて朱全忠が口をきわめて徳王をそしり、王位にあることさえけしからぬのに崔胤がそのことを申立てぬのが怠慢であるようにいった記憶があった。そして崔胤は朱全忠の言を忠実にとりつぎ、昭宗も王位は奪いはしなかったものの部屋住みの地位におくことにしたと思ったのに今ここで年長者として濮王にこだわったことに割切れぬものを感じた②。朱全忠の意向どおりに輝王を推しつづけたが、朱全忠には何らかの思惑があって輝王推薦を希んだにちがいないと

思われてきた。その思惑とは、元帥に 幼王 を据え、実権は副元帥たる自己の手中に収めることで軍事大権を天子公認のものとして承握し、篡奪への布石にしようとするにちがいない。その確信は、4月、朱全忠が判元帥府事を領したことによって揺ぎないものとなった。両者の間は何となくぎくしゃくしてきた。亀裂は、5月、崔胤が提出した総計六千六百人の六軍増員計画が承認され、京師の東西の広場に於いて募集と選抜が行なわれるにいたってさらに拡大した。朱全忠は、麾下の兵士たちを浮浪者にしたてて六軍兵士公募に応じさせ、内部事情をさぐらせた。彼らの通報によると、密偵がもぐり込んだとは気づかぬ崔胤らは、城外の寺院・仏像を毀して銅鉄材を調達して兵器製造に大童であるという㊸。朱全忠の崔胤排除の意向はかたまり、天祐元年正月の実行に移されたわけである。

崔胤の死から十日後の丁巳の日、朱全忠は洛陽への遷都を強要し認めさせた。翌日には長安在住の士民はすべて洛陽への移住を強制された。彼らは口々に、今日自分たちにふりかかった災厄は崔胤めが招きよせたのだと罵った。移住者の列は一ヶ月余もひきもきらずにつづいたという。五日後の壬戌の日には昭宗とその一行が長安を後に洛陽にむかった。天子のための宮殿などはかねてから修復工事が行なわれていたが、長安在住の士民をも移住させるとなると多数の住居が必要となる。その上、官庁舎や宮殿の不足もあり多量の建築資材が必要となったことと、昭宗や百官士民に故都恋しさの懷を抱かせぬためには長安を徹底的に破壊するにしくはないこととの一挙兩得策から、すべての建造物を解体して材木を筏に組んで渭水を経て洛陽にまで河下りをさせることにした。こうして世界帝国の中心として東西文化の粋を集めた繁栄をはこった長安も一朝にして廃墟と化した。

朱全忠の篡奪実現までにはもうあと一歩である。終局的に事態をここでもちこんだがために、多くの史家によってその責任の大部分が崔胤の肩にかぶせられてきた。それは果してすべて妥当といえるのであろうか。

新唐書は崔胤を姦臣伝に列したことによって評価をあらわにし、旧唐書も、崔胤伝に太子少傅責授の制を長々と引用することによって責任を問うて

いるかのようであり、また、朱全忠のために篡奪の実現のための設計図をひいてやったが余りにも朱全忠が実行をいそぎすぎるのに危懼を感じて自己の身を護ろうとして殺されたかのように記し、昔から盗賊と連繋したために宗族・社稷を覆えし亡した者は数多いが崔胤のごとくすさまじい者はなかったと結んでいる。しかし、私は司馬光の見方に共感を覚える。通鑑264 天祐元年正月 戊申の条に附された通鑑考異の按語に、

崔胤が人目につかぬところで悪たくみを働いたことには責めても責めきれぬ罪があるであろう。しかし、朱全忠を召しよせたのはもともと全忠の兵力を仮りて宦官を排除しようとしただけのことにすぎなかった。宦官がすっかり誅滅されてみると、全忠の兵勢が前にまして強いものになり、ついには篡奪まで志すようになってしまった。そこで崔胤はまたしてもいつわりあざむいて全忠を亡き者にしようとはかったが、全忠にそれとさとられて殺されたのだ。若し唐が崔胤の存在が一因になって滅びたというならば、それはそうであろう。けれども、旧唐書列伝に「胤は全忠のために王者となるための方策を図ってやった」と云い、実録に「胤の志は唐祚を滅すことにあった」と云うようなことは恐らくあたらずであろう。胤は唐に仕えてすでに筆頭宰相であった。それなのに唐を滅して梁をたてることで彼自身どのような利益を受けるとするのか。仮りに胤にそうした気持があったとするならば、全忠の篡奪が速に行なわれぬことを苦にしたはずである。どうして篡奪の実行を妨げようなどと謀ることがあろうか。これこそ所謂天下の悪名が皆一つところに集中するということで実際はもっと割引いて評価せねばならぬことなのだ云々。

とあるのがそれで、崔胤を朱全忠の篡奪の協力者として責任を問うことの行きすぎを指摘しているのだが、そのような感じを抱せるところが通鑑の崔胤の事蹟についての記載の中に多く見出すことができる。そして、それが互に矛盾する点を感じさせる㊹。私は崔胤が唐末に於いて果たした役割についての評価は、唐の後継者が朱全忠でなく誰であったにしろ非難以外の何物でもなかったであろうと思う。

(1979年8月1日)

補 注

①新唐書223下 姦臣下に収める崔胤伝末を参照して潤色した所があることをおことわりする。

②新唐書63表3 宰相下 光化3年参照。

③別表(1)参照。

④合譜について。このような作意をして望族の一支脈に加えてもらうのを合譜というが、一般からは卑しまれたとはいふものの相当広範に行なわれたらしい。旧唐書81 李敬玄伝に、「敬玄、亳州譙人也。…久居選部，人多附之，前後三娶，皆山東士族。又与趙郡李氏合譜，故台省要職多是其同族婚媾之家。」とあるのがその例で、「世系」にはたしかに記載されているが、北史には敬玄の系統についてふれるところがない。まさに合譜の代表というべきであろう。なお、譜学については、内藤湖南「支那中古の文化」第十講貴族中心時代（『内藤湖南全集』10 筑摩書房）参照，更に詳考したものとして、宇都宮清吉「唐代貴人の一考察」（『中国古代中世史研究』創文社）。

⑤新唐書163 崔郾を筆頭とする清河小房崔氏伝の末尾に、その繁榮隆盛が宣宗を感歎させたことを記す。

⑥注⑤を参照。なお、唐代、清河崔氏の門流の中で小房崔氏が最も著名であったことは唐語林4 企羨 太原王氏に見える。

⑦注④にひいた李敬玄の例などの類はもっとある筈であろう。

⑧史臣曰、近代衣冠人物門族昌盛，從邕之後，寔富名流，而彥曾屬徐亂之秋，胤接李亡之數，計則繆矣。（下略）

⑨嘗与崔慎由議帝前，慎由請甄別流品，瑒質曰，王夷甫相晉，崇尚浮虛，以述流品，卒致淪夷。今日不循名責實，使百吏各稱職，而先流品，未知所以致治也。慎由不得對，由是罷宰相。

⑩通鑑265 昭宣帝天祐2年3月。「初，柳璨及第，不四年為宰相，性傾巧輕佻，…同列裴枢・崔遠・独孤損皆朝廷宿望，意輕之，璨以為憾。」とあり，宰相となるにも順序をふまえた遷転を経ることが必須と考えられて居り，才能中心の科擧合格者といえども急激な昇進は特別な目でみられたらしいことがわかる。新唐書223下姦臣下 柳璨にも同じようなことが記されるが，柳公綽の族孫であったが野鄙な性格のため柳氏の同族とは扱わ

れなかったことも記している。

⑪清河崔氏亦小房最著，崔程亦清河小房也。世居楚州宝应县，号八宝崔氏。（中略）程累郡無政績，小杜相聞程諸女有容德，致書為其子讓能娶焉，程初辭之，謂人曰，崔氏之門若有一杜郎，其何堪矣。而杜相堅請不已，程不能免，乃干宝应諸院，取一娣姪嫁之，其後讓能貴，為国夫人，而程之女不顯。

⑫旧唐書184宦官 楊復恭伝に復恭が假子山南西道節度使楊守亮に宛てた書簡60通余りが李茂貞から昭宗に進上されたが，その中の復恭引退の理由を訴えたものに「承天是隋家旧業，大姓但積粟訓兵，不要進奉。吾於荆榛中援立寿王，有如此負心門生天子，既得尊位，乃廢定策国老。」なる一節があつてその自負のほどを示していたとある。

⑬旧唐書177 崔胤伝

⑭注⑬に同じ。

⑮新唐書208 宦者下 劉希逸伝の記述は時の前後関係などに混乱があるのでそのままには受取れないがクーデター関係の記録は相当に豊富である。通鑑262と相補って読むことで，相当な事実関係を知り得よう。

⑯通鑑262 昭宗光化3年11月庚寅。ここに記された皇后と宦官及び昭宗のやりとりは当時これらの人々の間で使われていたであろう言語で記されるが生々しい雰囲気伝える効果をあげているようである。

⑰拙稿「唐の官僚制と宦官」（『中国中世史研究』中国中世史研究会）及び「甘露の変始末」（『長野大学紀要』4）

⑱新唐書208 宦者下にはすでに李振は程巖からクーデターの相談を受けていたというのが信用できない。

⑲注⑱と同じ伝に，劉季述は朱全忠と義兄弟の約を結んでいたとあるが，通鑑には見えない。しかし何ほどかの緊密な関係があつたことを裏づける話柄であつたのであろう。

⑳旧唐書175 昭宗十子，新唐書70下 表10下 宗室世系下 昭宗十七子 のいずれにも漢王は見えない。通鑑考異には漢王とは徳王裕が改封されたものであろうという。とすれば，通鑑264 天復3年2月の記事にでてくる漢王と265天祐元年7月にのせる徳王のいずれも朱全忠に忌避された皇子

は同一人物となって二つの記事を無理なくつなげて考えることができる。考異の改封説に従いたい。

②通鑑265 天祐元年7月に、「初朱全忠…見德王裕眉目疏秀，且年齒已壯，惡之。私謂崔胤曰，德王嘗奸帝位，豈可復留，公何言之，胤言於帝。帝問全忠。全忠曰，陛下父子之間，臣安敢窃議，此崔胤売臣耳。」とあり，崔胤がとりついだ全忠の意見に対して昭宗が真意をただしたのに全忠は胤の作りごとだとごまかしたのである。

③旧唐書177 崔胤伝「胤毀城外木浮図，取銅鉄為兵仗」後周の世宗の排仏は兵器，銅銭鑄造の材料として仏像を毀つためであったとはよく聞くとところであるが（宮崎市定「東洋的近世」など）これはその先駆というべきか。

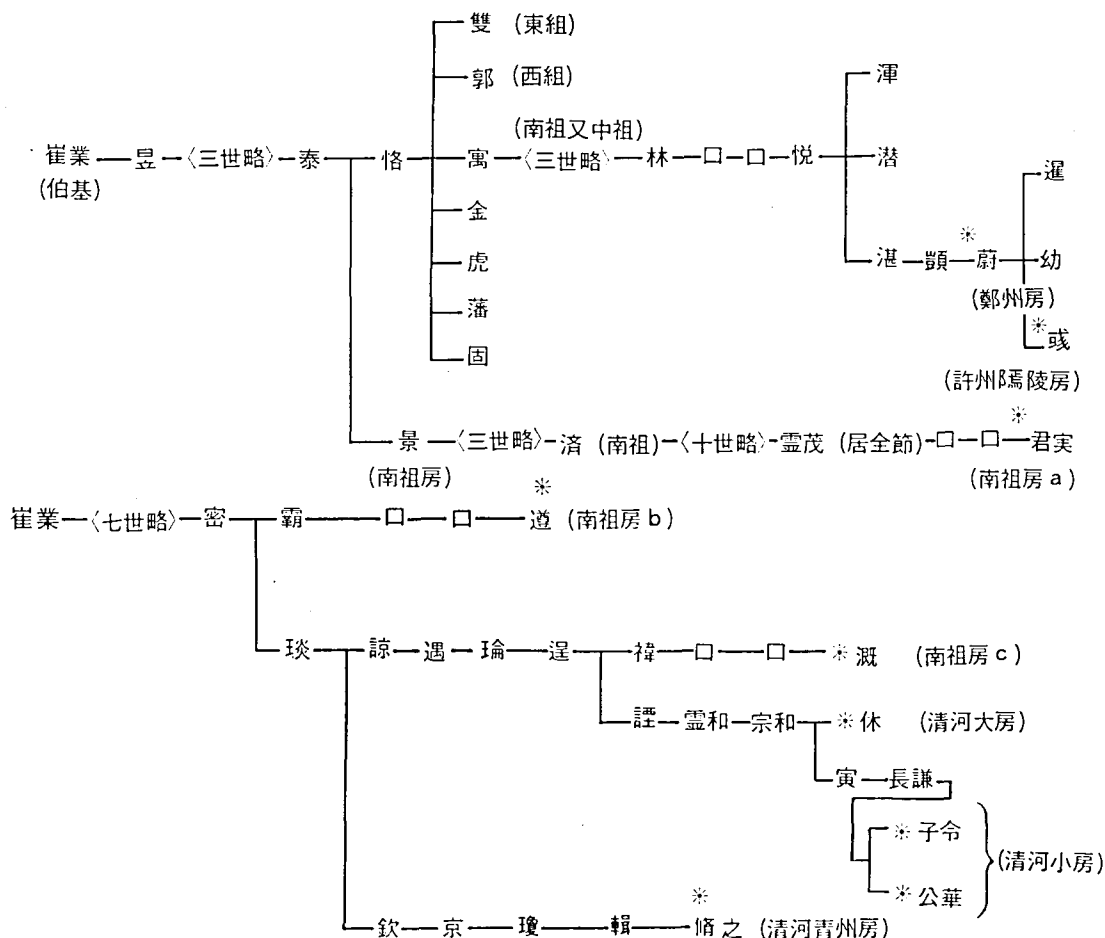
④通鑑264 天復3年2月に李克用が京師によこしていた使者の報告で崔胤の行状をきいて吐い

たこととして「胤為人臣，外倚賊勢，内脅其君，既執朝政，又握兵權。權重則怨多，勢伴則讐生，破家亡国，在眼中矣」と記して，胡注によれば克用の見識をわざわざ書きつけているのだというが，李克用がもし朱全忠の立場にあったとしたら崔胤を遠ざけたであろうか。

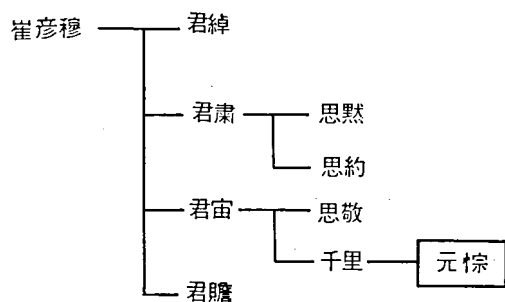
また北夢瑣言17に同様な話をのせ「助賊為虐者，其崔胤乎。破国亡家，必在此人也」とある。実力は朱全忠に劣らぬながら生前遂に帝位につくのを朱全忠一反逆者から寝返り組の巨頭一に阻まれた黄巢の乱平定の最大の功労者といってよい李克用に対する同情的雰囲気作り出した挿話の一つとして話しつがれたものなのであろう。他にも朱全忠の対抗者となった者たちの崔胤評があるが，ここではこれに代表させておく。

別表(1) 清河崔氏略図 (新唐書72下表12下宰相世系2下により作成。以下同じ)

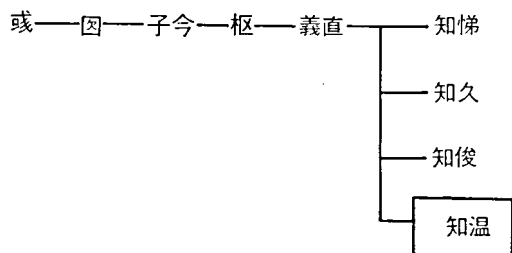
※この系図では「世系」に表示される人物以前を図にした。※が表に最初に出る人名。



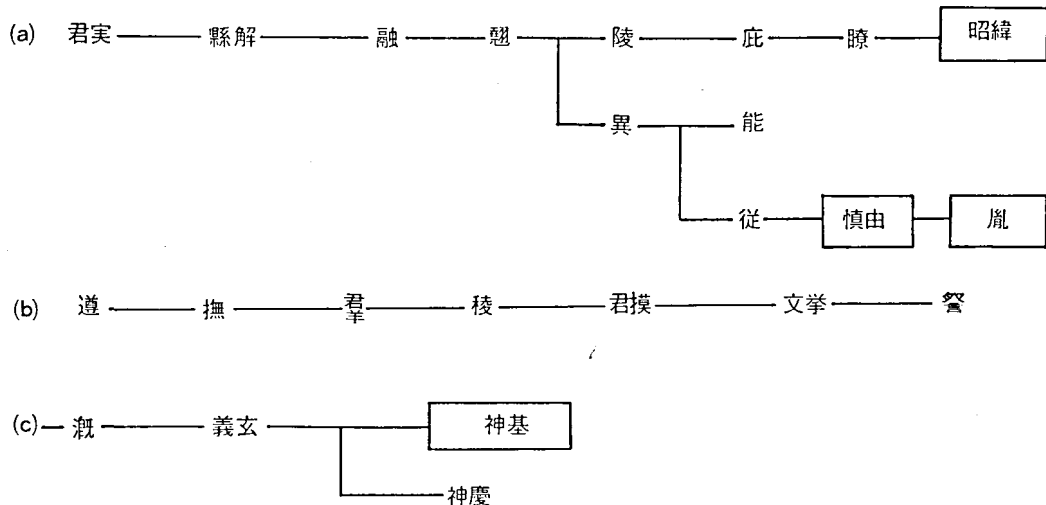
別表(2) 崔氏各房系図(鄭州房)



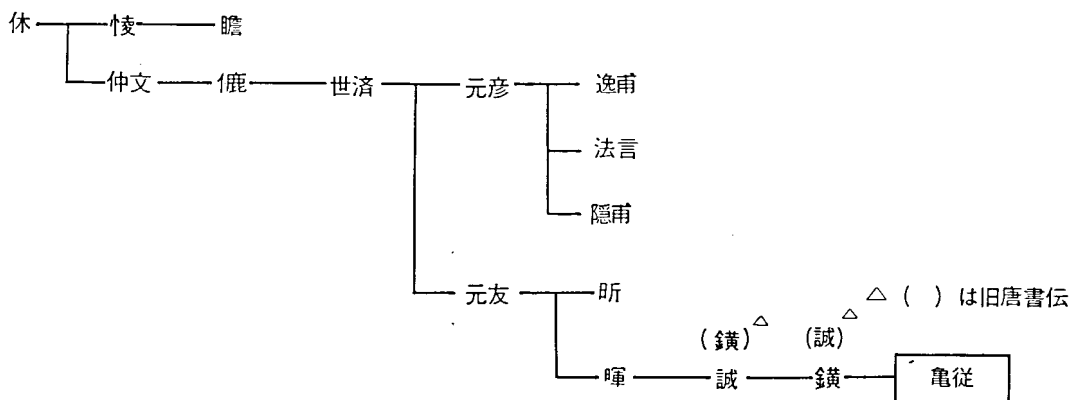
別表(3) (許州陽陵房)



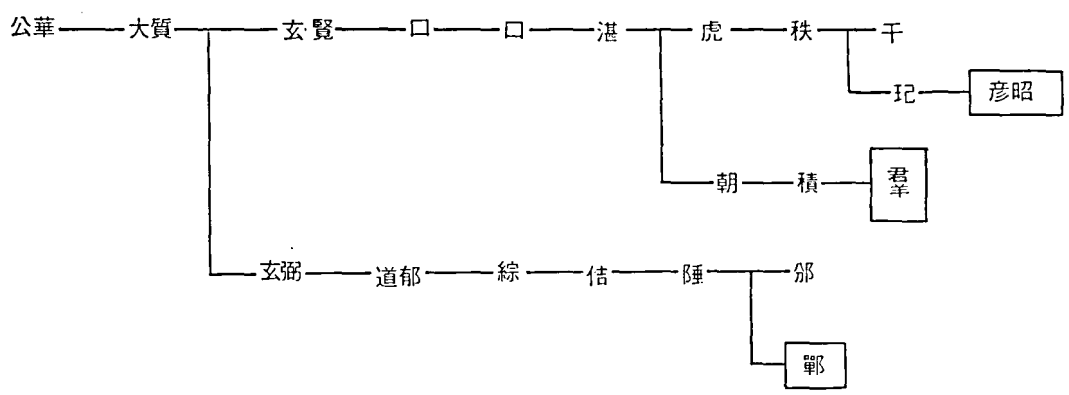
別表(4) (南祖房)



別表(5) (清河大房)



別表(6) (清河小房)



別表(7) (清河青州房)

